■　南山大学　人間関係研究センター　公開講演会

教育法としての修業

日時：2018年９月18日（火）18:00～20:00
場所：南山大学　D棟地下１階DB１教室
講師：**内　田　　樹　氏**
（神戸女学院大学名誉教授）

内田氏：

皆さんこんばんは。今、ご紹介いただきました内田でございます。

今日は、「教育法としての修業」という題で話を致します。ご紹介にありましたように、修業的な教育と、現在の学校教育を対比させて論じる予定です。つまり、学校という教育機関と道場という教育機関、その違いについて、原理やシステムがどう違うのか、結果的にどのような資質や能力が開花することになるのか、そういう話をしたいと思います。でも、その話は始めると10分ぐらいで終わっちゃいそうなので、それは結論の部分でやるとして、さっきまで違う原稿を書いていたので、マクラにその話をします。

このところよく来る原稿依頼が「平成の30年を懐古して」というものです。いろいろな媒体から、今３つ来てます。一つは通信社から来た仕事で、1989年から今年まで、平成の30年間のいろんなトピックについての、代表的な写真、ジュリアナ東京で女の子たちが扇子を持って踊っている写真とベルリンの壁崩壊、天安門事件の写真から始まって、今日に至るという。写真が何百枚か並べた展覧会をやるそうで、それに序文として、「平成の30年を振り返る」というコメントをつけるお仕事でした。

平成30年、1989年からの30年間を振り返って、一体何があったんだろうなということを考えました。それは今日の教育の話にもかかわってくるんですけれども、結局、この30年間って、日本の国力がどんどん右肩上がりに上がっていって、ピークを極めて、ピークアウトして一気に落ちて今に至るというプロセスだったと思うんです。平成の初めぐらいに日本の国力はピークを極めて、以後、低下し続けている。そういうような30年間だった。

この長期低落傾向の中で、国力を何とか回復しようという努力が何度か行われたのですけれど、いずれも失敗して今日に至っている。そういう話を書きま

した。その時に、「戦後史５段階論」というのを思いついて書いていたんです。なかなかよくできていると思ったので、この「戦後史５段階論」をマクラにお話したいと思います。

1945年、敗戦から後の今まで73年間を５段階に分けます。そんな分類をしている人はたぶん他にはいないと思うんですけれど。最初は1945年から、1972年の沖縄の施政権返還まで。戦争が終わって、焦土となった国土を何とか復興しようとした時代です。1951年にサンフランシスコ講和条約が締結されて、同時に、旧日米安保条約が締結され、形式的には国家主権が回復され、国際社会に復帰します。そして、1956年に戦前の一人当たりGNPにまで経済が回復して、当時の経済白書が「もはや戦後ではない」という有名な言葉を書きました。僕が小学校に入るぐらいのときの話です。

このあたりから72年までを一応「第１期」とします。第１期を特徴づけるのは徹底的な対米従属です。敗戦国日本はポツダム宣言に基づいて、連合軍に占領されました。サンフランシスコ講和条約が発効した段階で、占領軍は撤収することになっていました。ポツダム宣言には、「日本に軍国主義の勢力が残存している限り、占領軍はここに駐留する」と規定されています。つまり、日本に残存している、かつて戦争を起こした軍国主義勢力を根絶して、日本が戦争遂行能力がなくなる日までは連合国が駐留する、と。ポツダム宣言にはそう書いてあります。日本から「戦争能力が失われたことが確認される時」までと、占領の期限は明言されているのです。サンフランシスコ講和条約が締結されたということは、日本からはもう軍国主義勢力が根絶された、戦争能力が失われたことが国際的に認知されたということを意味しています。ふつうなら、ここで日本は主権国家として国際社会に復帰したわけですから、占領も終わるはずです。でも、終わらなかった。というのは、そのときに、旧日米安保条約が締結されたからです。

日米安保条約には、日本には戦争遂行能力がないので、これを守るために米軍が駐留すると書かれています。日本には「独自の防衛力が充分に構築されていない」ので、「暫定措置」として、日本の要請に基づいて、米軍が日本国内に駐留する、と。

ポツダム宣言では、日本に戦争遂行能力がある限り米軍が駐留するとし、日米安保条約では、日本に戦争遂行能力がないので米軍が駐留するということになった。日本に戦争遂行能力があろうとなかろうと、どっちにしても米軍は日本に駐留する、と。そういう話になった。

後に国務長官になったジョン・フォスター・ダレスは、日米安保条約によって「我々は、日本に、望むだけの軍隊を、望む場所に、望む期間置くことができる」と述べました。日米安保の本質はこの言葉に集約されています。「日本が米軍の駐留を希望している」から米軍がいるのだという言葉で、あたかも日

本政府の要請で米軍は駐留しているかのように書かれていますけれど、日本政府には、米軍の駐留を「希望しない」と言い出す権利が事実上ない以上、51年に、日本は法理上はともかく、事実上アメリカの属国になりました。

それから後の日本の国を挙げての努力というのは、いかにしてアメリカから独立するか、どうやって国土を回復するか、国権を回復するかということに集約されたと申し上げてよいと思います。北方領土と沖縄という失われた国土を回復すること、属国身分から主権国家に這い上がること、これが日本の戦後の国家目的だったわけです。

けれども、その時点で日本が採択しうる外交戦略は「対米従属を通じての対米自立」というものしかありませんでした。これは白井聡さんと一緒に本を出したときに２人で繰り返し確認したことですけれど、「対米従属を通じて対米自立を果たす」というきわめてトリッキーな国家戦略を日本は選択した。それ以外に選択肢がなかったのです。ソ連、あるいは中国と連携して、国内に共産主義革命を起こして、アメリカの支配下から逃れるという選択肢は理論上はあり得るでしょうけれど、それはアメリカの属国であることを止めて、代わりにソ連か中国の属国になるということに過ぎず、「主人」を替えるために革命闘争をして、内戦的な混乱を招くなどというのは、現実的にはまったくナンセンスな選択肢です。

ですから、51年時点で、日本人に選択できる国家戦略は「徹底的な対米従属を通じて、友邦としてアメリカの信頼を獲得し、国土と国権を戻してもらう」というものしかなかった。僕はこれを「暖簾分け」戦略というふうに呼んでいますけれど、これは日本人にとってはそれほど違和感のないものだったと思います。大店に勤めた丁稚が、手代、番頭と出世して、ひたすらご主人に忠義を尽くした結果、ある日、ご主人に呼ばれて、「お前も長い間よく忠義を尽くしてくれた。うちの暖簾を分けてやるから、これからはひとりでおやり」と言ってもらえるというのは、近代に至るまで、日本人にとってはごくふつうのキャリアパスだったわけですから、違和感のあろうはずがない。

「徹底的に忠義を尽くすことによって独立を許される」という話は、おそらく欧米人には理解しがたいと思いますけれど、日本人にとっては十分に説得力があった。せいぜい20年か30年、目いっぱい忠義を尽くせば、どんな権力的で、吝嗇な「ご主人」でも、「暖簾分け」を許さないはずがない。こき使うだけで、最後まで独立を許さないような非道なことをしたのでは、商いの道にはずれる。日本人はたぶんそう思ったんだと思います。そんな理屈が果たしてアメリカ人相手に通じるだろうかというようなことは考えなかった。

けれども、この「対米従属を通じての対米自立」は部分的には成功したのです。朝鮮戦争、ベトナム戦争と、アメリカがアジアで行った戦争の後方支援に徹したことで、日本は戦争特需で潤ったばかりでなく、68年には小笠原諸島が、72年には沖縄の施政権が返還されると恩沢に浴した。沖縄の施政権返還が51年

の旧安保条約から数えて21年目です。「20年くらい忠義を尽くせば・・・」いう「暖簾分け」戦略の見通しは、この時点までは現実によって裏付けられていたのです。ですから、「対米従属を通じての対米自立」という戦略については、イデオロギー的には「気に食わない」という人はいましたけれど、現実の有効性については、文句のつけようがなかった。これが第１段階です。

その後、戦後日本は第２段階に入ります。第２段階へのシフトを駆動したのは、1952年から72年にかけての20年にわたる高度経済成長です。この20年間のGNP年平均成長率は9.4%。奇跡的な数字です。

けれども、この経済成長をドライブしていたインセンティブというのは、実は「対米自立」なんです。外交的な対米従属で成功してきたわけですから、アメリカに敵対するという動きは出てくるはずがない。でも、敗戦国として、属国として、戦勝国の支配下にあるわけですから、戦前の日本が国家主権を持っていた時代を記憶している世代からすれば、これは耐えがたいことなわけです。少しの間なら属国状態も「緊急避難」的措置として耐えることもできるかも知れないが、こんな状態が二世代三世代と続けば、いずれアメリカの属国であることが「一時的な異常事態」であるのではなく、「生まれてからずっとそうだった」という世代が圧倒的多数を占めるようになる。そうなったら、もう「対米自立」という動機そのものがリアリティを持たなくなる。だから、「対米自立」までには、それほど時間的余裕がなかった。せいぜい30年、一世代くらい。1980年代までには対米自立を成し遂げないと「間に合わない」というのが現実的な判断だった。そんなこと口に出しては言いませんけれど、みんな心の中では思っていたはずです。

例えば、沖縄の施政権返還にしてみても、明らかに「大義なき戦争」であったアメリカのベトナム戦争を支援したことによって獲得した「ご褒美」なわけです。ベトナムの農民たちがナパーム弾で焼かれているときに、加害者側に立つことによって日本は利益を得た。ある意味で、アメリカの「犯罪」に加担することで「分け前」をもらったような話です。

僕と同年配の方たち、60年代のベトナム反戦闘争のことを記憶している方は同意して下さると思いますけれど、日本の若者たちのベトナム反戦闘争をドライブしていたのは「疚しさ」です。自分たちだけがアメリカに追随することの代償に、経済的に潤い、国土を回復している。その事実に対して日本の若者たちは疚しさを感じていた。「こんな汚いこと」をやっていて、アメリカからの「ご褒美」を待つというような卑しい国でいいのか、という怒りと屈託がやがて全国学園闘争にリンクすることになる。

そういうはっきりとした反米感情の露出とは違うかたちで、日本のサラリーマンたちは「対米自立」のために戦っていた。当時、日本のサラリーマンたちは「エコノミック・アニマル」と蔑称されていた。それほどまでに狂ったよう

な勢いでビジネスをしていた。

江藤淳は60年代のはじめにプリンストンに留学していたのですが、滞米中にニューヨークで旧制一中時代の友人と会います。そのときに商社マンであるその友だちからかなり厳しいことを言われるんですね。

「おれがばかみたいに一生懸命やっているのは、おれだけじゃない、うちの連中がみんな必死になって東奔西走しているのはな、戦争をしているからだ。日米戦争が二十何年か前に終わったなんていうのは、お前らみたいな文士や学者の寝言だよ。いいか、完全にナンセンスな寝言だぞ。これは経済競争なんていうものじゃない。戦争だ。それがずうっと続いているんだ。おれたち、はそれを戦っているのだ。今度は敗けられない。」

これは当時の日本のビジネスマンの感覚としてかなり正直な発言だったと思います。高度成長期の産業戦士たちを死ぬほど働かせたのは、別に「金が欲しい」という強欲ではなかった。「アメリカ相手の経済戦争で、今度は勝つ」という思いがあった。僕はそう思います。

だから、第２期は、高度経済成長によって、経済力でアメリカと五分に張り合おう、そういう夢が膨らんできた時期です。この時期の日本人が多幸感を持っていたのは、この戦争に勝ったら、日本はついにアメリカから国家主権を回復できるのではないか、そう考えたからです。第二期のピークが平成の始まる年、1989年です。

1989年は昭和天皇が崩御されて、元号が改まった年ですが、ベルリンの壁崩壊があり、天安門事件があった激動の年でした。同じ年にエポックメーキングな事件がアメリカで起こります。一つは三菱地所がマンハッタンのロックフェラーセンターを買ったことです。一区画丸ごと買ったんです。そして、同じ年にソニーがパラマウント映画を買った。日本の企業が摩天楼とハリウッド映画を買った。これを単なる投機と考えることはできないと僕は思います。摩天楼とハリウッド映画を買うというのは、非常に象徴的なふるまいです。これこそ日本人にとってアメリカを象徴する記号だからです。

かつてダレスが「我々は日本の好きな場所に、好きなだけ軍隊を置くことができる」と豪語しましたけれど、それに対する35年後の日本側の返答は「我々は、たとえアメリカ国内であっても、それに値札がついていさえすれば、欲しいものを、欲しいだけ買うことができる」と宣言することだった。

こんなことを言う人は他にいないので、これは完全に僕の妄想的なスペキュレーションなのですけれど、この1989年に日本人の頭にあるアイディアが浮かんだ。それは「金で国家主権を買い戻す」ということです。買えないものはないくらいに日本は金持ちになっていました。バブルの頃によく「日本の地価を合計すると、アメリカが二つ買える」というジョークが口にされましたけれど、あれは半ば本気で言っていたのだと僕は思います。

日本を買い戻すと言ってもそれほど劇的な話じゃない。沖縄から米軍基地に

出ていってもらうために、グアムでもテニアンでも、日本の政府が金を出して土地を買って、港湾施設をつくって、飛行場を作って、ついでに、豪奢なハウスを建てて、ゴルフ場をつくって、レストランをつくって、ヨットハーバーをつくって、「これ全部差し上げますから、沖縄から出て行ってください」と提案すればいい。それくらいの金はあったんです。これくらい金があれば、国土と国家主権を札びらを切ってアメリカから買い戻すことだってできるんじゃないか。口には出さなかったけれど、日本人の脳裏に一瞬はよぎった妄想だと思います。

平成の初めのころの日本人に取り憑いていたある種の全能感、多幸感の内実というのはこれだったんじゃないかと僕は思います。とうとうこれだけの経済大国になった。アメリカの背中が見えて来た。このままゆけば、世界一の経済大国になることも不可能ではない。世界一の経済大国が自分より貧しい国の属国であるという法はない。

バブル期の日本人ほど「金の全能性」を信じていた人種はなかなか見出し難いと思います。それは、お金があれば何でも買える。ドンペリを飲むとか、ベンツを買うとか、アルマーニのジャケットを着るとか、そんな消費活動レベルの話じゃなくて、もしもアメリカから国土と国家主権を買い戻せるなら、そのときには晴れて独立国家になれる。その夢をぼんやりと感じ取っていたからだと思います。

でも、バブルは崩壊した。バブル崩壊のときの日本人のすさまじい虚脱感を同時代の方はご記憶であろうと思います。ほとんど茫然自失という感じでした。

でも、考えてみると変な話なんですよ、バブルの崩壊なんていったって、一体いつ崩壊したと言われても特定できるわけじゃない。89年に消費税が導入された。90年には不動産の土地関連融資のいわゆる「総量規制」が通達された。日経平均株価が史上最高値を記録したのは1989年の大納会です。翌年の10月には半値近い水準にまで暴落します。それでも地価はまだ上がり続け、地方によっては93年まで上昇していた。

だから、バブル崩壊が「いつか」ということは特定が難しいのです。現に、それからさらに20年間、日本は世界第２の経済大国であり続けています。42年間保っていたGDP世界第２位の中国に抜かれるのは2010年のことです。

ですら、バブルの崩壊で何もかも失ったというのは「時代の気分」の問題であって、必ずしも経済の実相を映し出した言葉とは言えない。でも、日本は口に出さないまでも、心の中ではアメリカを抜いて「GDP世界一」になることを目指していたんです。そして、金で国家主権を買い戻すことを夢見ていた。それが潰えた。金はまだたっぷりあった。でも、もうGDPでアメリカを抜く可能性はなくなった。欲しかったのは金じゃなかったんです。欲しかった「金で買えるもの」があったけれど、それが買えなくなった。そのことに愕然とした。

その後に３段階が来ます。でも、この話をしているとさっぱり修業の話が始

まりませんので、巻きを入れます。とにかく第５段階まで駆け足で参ります。

第３段階が、2001年の小泉純一郎の登場です。経済的な超大国になることで国家主権を回復するという夢が潰えた。そしてオルタナティブとして提出されたのが、政治大国になることでアメリカのイーブン・パートナーとなるというソリューションでした。

その当時、幸いなことに、アメリカの大統領は例外的に無能なジョージ・W・ブッシュという人でした。カウンターパートに無能な大統領を得たことが小泉純一郎の幸運でした。2001年の同時多発テロ直後こそ90%という「戦時大統領」としてのご祝儀支持率を得たものの、2008年には19%という歴代大統領最下位の支持率にまで下がり続けた。その落ち目の全期間、小泉首相はブッシュ大統領の全政策を支持し続けた。国際社会の支持があるときに支持にまわってたいして感謝されることはありませんけれど、国際社会もアメリカの有権者もそっぽを向いているときにさえ小泉首相はブッシュに満腔の支持を表明した。ブッシュ大統領はこれを恩義に感じたはずです。このとき、日米関係は歴史的な「蜜月」期を迎えます。小泉はこれを日本がアメリカと「対等」になるビッグチャンスと見立てた。そして、2005年に安保理の常任理事国に立候補するという大バクチに打って出た。五大国に準じる政治大国となって国際社会でアメリカの盟邦として、重きをなす。そうなればもうアメリカも日本を属国扱いできないのではないか・・・「政治大国化による国家主権の回復」というプログラムを小泉純一郎が考えた。

当時の小泉純一郎の人気って、若い人はご記憶じゃないでしょうが、すさまじいものでした。ある世論調査では支持率87%を記録しています。でも、個別的な政策を見ると、特に国民が喜ぶようなことはやっていない。「自民党をぶっ壊す」という印象的なスローガンの他には、構造改革・規制緩和という一連の新自由主義的な政策を実施しただけです。平たく言えばアメリカの企業に日本の市場を開放しただけの話で、日本の国民的な利益に直接結びつくような内政上の達成があったわけじゃない。にもかかわらず、すさまじい人気があった。それは「この人はもしかすると日本を独立国家にしてくれるんじゃないか、主権国家にしてくれるんじゃないか」という期待があったからです。北朝鮮との電撃的な平壌宣言もそうですけれど、日本はアメリカの振り付け通りに動く「傀儡」ではなくて、自立的な外交ができる国になったんだという幻想を小泉は与えてくれた。

でも、満を持して臨んだ2005年の安保理の常任理事国入りが大失敗するわけです。アジアで支持してくれたのは３カ国だけでした。アフガニスタンとモルジブとブータンのみ。ASEAN諸国からの支持はゼロでした。理由は簡単で、日本が常任理事国になっても、それはアメリカの票が１個ふえるだけだと国際社会は考えたのです。アメリカの全政策を、失政を含めて支持し続けたことによって、アメリカからの信頼は獲得したけれども、国際社会からの信頼は失っ

た。この時点で「第三段階」が終わる。

そして、第四段階が2009年の民主党への政権交代です。経済超大国への夢も潰えた、政治大国化の夢も潰えた。もう切るカードがなくなった。だから、鳩山由紀夫首相はアメリカに対してこれまでの日本の政権が一度も言った言葉を告げたのです。「国土から出て行ってください。国家主権を返してください」と。これは1951年の旧安保条約以来の「米軍が日本に駐留しているのは日本の国家主権の発動である。米軍は日本政府が懇請しているから駐留しているのである」という誰も信じていない「建前」を公的に否定したということです。そう宣言することがどれくらい政治史的に大きな意味を持っているのか、民主党政権にはその自覚がなかったのかも知れません。戦後日本が信じるふりをしていたフィクションをひっくり返したわけですから。主権の回復のためのプログラムはこれまで「口には出さない」まま、水面下でやってきたわけです。でも、打つ手がなくなったので、口に出してしまった。「できたら国外・最低でも県外」といのはそういう意味では歴史的な宣言だったのです。それは言い換えると「日本は主権国家ではない、アメリカの属国である」と総理大臣自らが認めたということなんです。だから、まことに不思議なことですけれど、日本国民の大多数はそれに共感するどころか、それを聞いて怒り狂った。

でも、変な話なんです。自国領土に駐留している外国軍に「出ていってくれ」と言ったら自国民が怒り出すというのは。どう考えてもこれは怒る方がおかしい。でも、圧倒的多数の日本国民は怒った。それは「日本には主権がない」というこれまでひた隠しにしてきた「国民的な秘密」を鳩山首相があっさり暴露してしまったからです。日本国民の「恥部」を満天下にさらしてしまった。それが許せなかったのです。バブルのときも、常任理事国入りのときも「主権国家になりたい」という本音を決して口にしないできた日本国民の抑圧の努力そのものを無効化してしまった。だから政官メディアの全方位からあれほどの憎しみを受けることになった。そうやって鳩山首相はわずか10カ月間で辞任し、あっという間に第４段階が終わった。第一段階が敗戦から沖縄返還まで27年、第二段階がバブル崩壊までの20年、第三段階が2005年までの13年。だんだん短くなる。

そして、2012年から安倍政権が始まる。これが第五段階に相当するわけですけれども、これはもう切るカードが何もないわけですね。経済カードも政治カードも、新しいカードは何もない。だから、前に切っていて、もう効果がないとわかっている「やっても仕方がないこと」だけをしている。外交的には全面的な対米従属、アメリカの企業に対する市場開放と、日本の公共財の切り売り。それで対米関係だけは延命できる。とにかく「やってはいけないこと」だけはわかっている。鳩山政権がやったことです。「国土を返してくれ、国家主権を返してくれ」ということはおくびに出してもいけない。それを言った瞬間に政権が崩壊することだけはわかっている。だから、対米交渉は一切何にもし

ない。全部アメリカの言う通りにするということだけが決まっている。「対米交渉」というのは、交渉らしきものをしているただの時間つぶしです。安倍政権の国会運営と同じです。「やっているふり」をしているだけです。最終的にはアメリカの要求を全部丸のみにする。それがわかっているから、アメリカは安倍政権の延命を許している。さすがに対米自立のために何もしなかった政権というのは戦後初めてです。

日本は主権国家であって、望むものはもうすべて手に入れているので、要求することはなにもない。完全に満たされているというのが安倍政権下の日本国民が享受している「妄想」です。もう全部達成し終えた。国土も回復したし、国権も奪還した。だから、世界中から日本は尊敬されている。世界中の人が日本をすばらしい国だとあこがれている。「日本すごいとか、「世界が尊敬する日本」とかいうテレビ番組や書物が溢れていますけれど、これが第五段階の特徴です。もう達成すべき目標がなくなった。すべては手に入ったので、何の努力も要らない。涅槃状態のうちにある。それが現在の日本です。

この何とも言えない酸欠感が時代に取りついている。だから、息苦しさをみんな感じているはずなんです。でも、何が足りないのか、何を達成すべきかについては誰も語らない。1945年から後、敗戦から後の国民的な課題であったはずの「国土の回復、国権の回復」は実はとっくの昔から達成されていたので、そんなことは今さら考えるに及ばない。それどころか、明治維新からあと先の大戦までの近代日本がやってきたことはすべて「すばらしい達成」ばかりであって、そのせいで世界中の人々から、とりわけアジアの旧植民地の人たちから感謝され、尊敬されているというような妄説に人々が取り憑かれている。

沖縄の基地問題に対する日本国民の無関心、北方領土に対する無関心、北朝鮮の拉致問題に対する無関心、すべて同根です。日本が何か外交的に「後手に回っている」という話そのものを否定している。今の日本は最高の状態で、安倍政権がやっている政策は外交も経済すべて成功しているという話のうちに眠りこけているのが現代日本人が落ち込んでいる「ニルヴァーナ状態」。

平成の30年間が終わろうとしている今、日本は明治維新以来ついに経験したことのない「国家的目標がなにもない」局面に到達した。これが僕の「戦後史５段階論」です。希望のない話をしてしまってすみません。長い枕でしたけれども、ようようやく本題に入ります。

日本はもう達成目標を失ってしまったわけですから、学校教育がダメになるのも当然ですね。達成目標があるうちは、どうすれば学校教育を通じて国力を向上させるかということが第一に考えられた。そういう言葉づかいはされませんでしたけれど、明治以来の学校教育を通じて「国家須要の人材」を輩出することでした。それは90年代までは実は変わってはいないんです。僕は大学を卒

業した後、大学院に行って、それから大学の教師になりました、あら40年近く学校教育の現場にいました。だから、国運の向上期における学校がどういうものであり、それが国運の衰退期になるとどう変わるのか、その違いが分かります。

金があると学校教育がどうなるか、鷹揚になるんですね。管理とかうるさく言わなくなる。「まあ、好きにやりなさい」という感じになる。バブル期に大学にいた方でしたら、その時期の大学を包んでいた底抜けの多幸感をご記憶だと思います。

僕は、82年から90年まで東京都立大という公立の、まことに貧乏くさい学校にいたんですが、その貧乏くさい学校でもバブル期はほんとうに優雅でした。毎年要求もしないのに予算がどんどん増える。助成金がつく。僕がいたのは仏文研究室です。フランスの小説だの詩だの哲学だのという何の生産性もない、社会的有用性のかけらもないセクターに専任教員が13人もいた。学部学生は学年に３人４人でしたから、教師の方が数が多い。だから専任は週に３コマか４コマしか授業がないんですよ。学生数が少ないですから、開講したけれど履修者がゼロだったというような授業もある。そういうのは「開店休業」と呼んだ。理論的に言えば、仮に開講科目のすべてが履修者ゼロだったら、まったく出勤しなくてもフルサラリーが出る。そういう時代錯誤な研究室にとてつもない金額の予算がつく。

仏文研究室だけで年間500万円の図書費がついた。それが毎年ですからね、いくら頑張ったって毎年500万円も本は買えません。僕は助手の時に研究室の会計をやらされた。計算は得意じゃないんですけれど、なんとか帳簿をつけていた。年度末に帳簿を締めて、春休みに家でのんびりしていたら、大学の経理から電話がかかってきて、「200万使い残しがある」と言うんです。「来年度に持ち越していただけませんか」とお願いしたんですけれど、年度内に使い切らないとダメだと言う。しかたがないので新宿のフランス図書という本屋に行って、「この棚の本全部ください」と200万本買ったことがあります（笑）。仏文科みたいな生産性のないところにもそれだけお金が回ってきた。

僕は50年生まれですから、バブル期には30代だった。今でも覚えていますが、85年に高校のクラス会がありました。クラス会に行ったら、最初から最後までずっと株と不動産の話だった。女子も含めて全員、ずっと金儲けの話をしていた。僕はまったく無縁なので、話の輪からはずれて端っこの方でつまらなそうに飲んでいたら、「内田、お前は株やってないのか？」と訊かれたので、「やってないよ」と答えたんです。そしたら、絡まれた。「なんで、内田は株やらないんだよ。お金が地面に落ちているんだよ。ただ、しゃがんで拾えばいいだけなんだよ。なんで、やらないんだよ。何かっこつけてるんだよ」って。「いやだ。お金って額に汗して稼ぐもんだろう」と言ったら万座の爆笑を買ってしまった。ほんとうに嘲笑されました。

こんなバカ相手にしても仕方がないから放っておこうということで同級生たちは僕のことを相手にするのを止めた。そういう時代だったんですよ。「地面にお金が落ちているのに拾わないバカ」がいるけれど、別に無理やり株や不動産を買えとは言わなかった。そんな「金にならないこと」が好きなら、好きにやっていればいいという感じで放置された。バカを相手にしてもしようがない、そういう時代でした。でも、そのおかげで僕たちは「放っておいてもらえた」んです。みんな金儲けに忙しくて、僕たちみたいな生産性のない研究をしている人間を相手にするほど暇じゃなかった。だから、好きなことをさせてもらった。まったく金にならない研究が好きなだけできた。

だからその時代の大学の学問的生産力はたいへん高かった。全分野でそうでした。当然ですよね。研究費がたっぷりついて、専任教員の数は多くて、休みが多くて、18歳人口は増え続け、大学進学率は増え続けて、「志願者確保」の努力なんかぜんぜんする必要がなかった時代なんですから。

僕がその頃やっていたのは19世紀20世紀フランスにおける極右政治思想と反ユダヤ主義の研究でした。現代日本と何の関係もない、何の役にも立たない研究です。でも、誰も文句言わなかった。もっと有用な研究をしろというようなことを言う人は大学の中にも外にもいなかった。お金があったからです。だから、バブル期の日本というのは、僕は個人的には大嫌いですけれど、大学にとってはよい時代でした。日本全体が金儲けで忙しいわけで、僕らのような「暇人」はほんとうに放置されて、相手にされなかった。そして、相手にされない自由を謳歌していたんです。うす汚い格好をして、うす汚れた研究室にとぐろを巻いて、そこで好きな研究をすることができた。誰も他人の研究の邪魔をしなかった。僕自身にとっても、この82年から90年の８年間は研究者としてもっとも幸福な時期だったと思います。この時期に大量の書物や史料を読むことができた。そのときの「仕込み」で後の20年以上食いつないだようなものです。

ですから、バブル期の日本は経済的にもピークに達していましたけれど、学術的発信力においてもピークを極めようとしていたんです。みんな金儲けに夢中だから、知性的な活動になんか用がないんです。用がないけど「止めろ」とは言わない。「向こうの隅っこに行って、勝手に遊んでろ」という感じでした。彼らからしてみたら、僕たち人文系の研究者に配る研究費なんてたぶん「鼻くそ」みたいなものだったんでしょう。でも、僕らはその「鼻くそ」を分け合って、「わーい、これでまた研究ができるぞ」と喜んでいた。

ところが、バブル崩壊から10年ほどして、2004年くらいから劇的に日本の大学の学問的生産力が落ちてゆきます。「金儲け」に夢中だった連中が、今度は「金の分配」にうるさく口を突っ込み出したからです。「お前たちのやっている研究にはいったいどれほどの社会的有用性があるのか？」というようなことを訊くようになってきた。それまではそんなこと誰も言わなかったんですよ。「やりたいなら、やらせておけよ」という感じだったのが、一転して「無駄なこと

に金を使うのは許せない」というふうになった。その時点で、日本はまだ世界第二位の経済大国だったんです。お金はまだたっぷりあった。でも、風向きが変わった。これは貧すれば鈍するってことなんですよ。貧するということは、別によくあることなんです。「貧すれば鈍す」ということです。人間は「パイ」が増量している間はパイの分配方法なんか気にしない。でも、「パイ」がちょっと縮んだだけで、いきなり「ちょっと待て」と言い出すやつが出て来る。「誰か『貰い過ぎているやつ』がいる。アンフェアだ」と言い出すやつが出て来る。「どんぶり勘定は止めて、ちゃんとしたエビデンスに基づいて、資源を有効活用しようじゃないか。アクティヴィティの高いところに多めに分配し、低いところは削ろうじゃないか。それがフェアネスというものだろう」と言い出した。「数値的・外形的な格付けに基づいて有限な資源は傾斜配分されるべきだ」ということがまるで自明の真理であるかのようにあちらでもこちらでも口々に言い出されるようになった。

バブルの崩壊のあと、日本の大学に突然出現したきたのが、この「格付け」です。一人一人の研究者がどの程度の有用なアチーブメントを果たしているのか、その成果を数値的に表示して、それに基づいて予算や権限を分配すべきであるということが大学の全領域で、言われるようになってきた。それまで80年代では大学ではまず耳にしたことのないビジネス用語が飛び交うようになった。「評価」「査定」「質保証」「工程管理」「費用対効果」「PCDAサイクル」といった工業製品の製造工程で使われる用語が大学の会議での頻出用語になった。

そんなこと言われても仏文学者は困ります。社会的有用性なんかないんですから。あるかも知れないけれど、19世紀フランスの反ユダヤ主義思想を研究することが現代日本社会にとってどう有用なのか200字以内で述べよと言われたって、言えるはずがない。

そうなると、そういう研究には予算がつかないことになった。そもそも仏文学科なんてものに存在理由がないということになった。もし社会的有用性があれば、市場の「ニーズ」があって、外部資金が調達できるはずだ、研究を続けたければ、どこからから自分で金を引っ張ってこい、と。

これ、一見すると合理的に聞こえますけれど、学術にとっては致命的なんです。だって、精密な「査定」というのはみんなが「同じこと」をしている場合じゃないとできないんです。みんなが同じ分野で、同じ主題で、同じ手法で研究していれば、出来不出来はすぐにわかる。でも、ばらばらの分野で、ばらばらの主題について、ばらばらの研究方法でやっていたら、それらの研究の優劣をつけることは不可能です。とくに、「誰もやっていない前人未到の分野」における研究は比較する対象がない。だから、「査定不能」つまり「ゼロ査定」されることになる。「みんながやっていることを、みんなよりうまくできる人」に高いポイントが配分される。「誰もやっていないことをやっている人」はゼロ査定される。

そうなると、大学でテニュアのポストを手に入れたいと思う若い研究者たちは競って「最も研究者が多い領域」に参入するようになる。研究業績の査定の精度はサンプル数に比例します。だから、研究者がひしめいている分野における査定がもっとも信頼性が高い。当然ですよね。こうして、人文科学系でも社会科学系でも自然科学でも、すべての分野で、「多くの人がすでに取り組んでいる研究分野で、他の人より相対的に優れた研究をすること」が研究者として生き残れるための条件になった。

こうして、精度の高い業績査定による研究者の格付けということを導入して、わずか10年で、日本の学術研究は「滅び」のプロセスに入ってゆくことになりました。

僕がいた仏文の学会も、ある時期から研究分野が「19世紀文学」に限定されるようになった。プルースト、フローベール、マラルメの研究発表ばかりが学会で行われるようになってきた。「最近増えたな」と思っていたら、あれよあれよというううちに、全分科会の半分くらいを占めるようになった。研究者が多い分野ほど査定の精度が高いので、そこで質の学会高い発表をすればテニュアを獲得できる道が開けると秀才たちは考えたのです。たぶん、同じようなことはすべての学術領域で起きたんじゃないかと思います。

たしかにそれによって研究業績の査定は精度を高めたと思います。実際に国際レベルの研究をする若手の研究者も出て来たはずです。でも、そんなハイレベルの競争に夢中になっているうちに、日本の大学の仏文科に来る学生がいなくなってしまった。当然ですよね。だって、研究者たちが「内輪のパーティ」にかかり切りになっていて、日本の高校生や中学生に向かって「フランス文学は楽しいよ。仏文においでよ」というアピールをまったくしなくなったんですから。僕が中高生の頃は、仏文といったら、小林秀雄、渡辺一夫、桑原武夫、鈴木道彦、大江健三郎、加藤周一、大岡昇平といった人たちを輩出する学科として認識されていた。ウッドビー・インテリゲンチャの少年にとってはあこがれの場だったんです。彼らは実際に高校生にもわかる話をしてくれた。政治や時事問題についても発言していた。だから「知性的な人間になりたい」という子どもじみた願望と「仏文科」という専攻選択の間にはリンケージがあった。もちろん幻想的なリンケージに過ぎないんですけれど、そのせいでどこの大学でも仏文科に何十人もの学生たちが集まってきた。

でも、仏文研究者たちが政治的発言も社会的活動もまったくしなくなって、ひたすら精度の高い査定を求めて研究に打ち込んでいるうちに、ある日気が付いたら、彼らがその「専任教員ポスト」のために努力してきた「ポスト」そのものが「市場のニーズがなくなりました」というにべもない理由によって消滅してしまった。考えてみたら当然なんです。仏文科の教員ポストは仏文に進学してくる学生がいるから存在しており、進学者がいなくなったらなくなる。じゃあ、どうすれば進学者を増やすことができるか。そんなの簡単なんです。80年

代に僕たちがしていたように、世間から無視されていても、自分の好きな研究ができるので楽しくて仕方がないという暮らし方をしていれば、その「楽しい研究」の成果をぽつぽつと発表していれば、「ああいう生き方も悪くないな」と思ってくれる子どもたちがぱらぱらと出て来る。たいした数はいらないんです。日本全土で年間にそういう物好きな子どもが数百人も出てきてくれれば、仏文科は維持できたんです。でも、それだけの数を確保することさえできなかった。

「仏文科に進学することを志望する中高生を増やすために何をしたらいいだろう？」ということを真剣に考えていた仏文学者は、90年代00年代の日本にはほとんどいなかったと思います。だったら、学問的領域ごと消滅するのも仕方がない。

それは他の研究分野でもそれほど変わらないと思います。「市場のニーズ」というような薄っぺらなビジネス用語は口にしていたくせに、自分たちのしている研究活動そのものが「楽しくて仕方がない」というもっとも重要なメッセージは子どもたちのところにはまったく届かなかった。そういう学術分野は遅速の差はあれ、いずれ消滅する。

そんなふうにして、わずか20年ほどの間に日本の大学から仏文科がほぼ消滅し、仏文の専門研究者を育てることのできる教育機関がほぼなくなった。もちろん、これからもフランスに留学して、向こうで学位を取って専門的な研究をする人はいるでしょうけれど、日本の大学にはもう専門研究者を育てる場がない。

もう手遅れなんですけれど、「格付けに基づく資源分配」が言い出されたときに、査定しないで「放し飼い」にする領域を少しでも残しておけばよかったんです。好きな研究ができて、それで飯が食えるという環境を少しでも残しておけば、そこがイノベーションの起点になりえた。でも、もう無理ですね。イノベーションというものが生まれる素地そのものがもう日本の大学にはないから。

一昨年はForeign Affairs Magazine が去年はNature が日本の大学の学術的生産力の低下と、科学研究の失速について長文の記事を掲載しました。海外メディアは日本のあまりに急激な学術的生産力の劣化に驚いているんです。でも、日本のメディアはこれをほとんど表示なかった。

先日も文科省が発表した修士課程、博士課程の進学者の伸び率が日本は世界、OECDで最下位ですよ。ほかは全部増えている中で、日本だけが減っている。人口当たり論文発表数は久しく日本がOECDで最下位です。高等教育に対する公的支出のGDPに対する割合もこれも日本はずっと最下位です。先進国の中で日本の学校教育のパフォーマンスは最低レベルなんです。日本よりはるかに小国で、GDPも、教育予算規模も桁はずれに小さい国が日本よりはるかに高いパフォーマンスを達成している。理由は「金の問題」じゃないんです。「貧

すれば鈍す」で、金を分配するときに「格付け」を導入したせいです。それによってほんとうにイノベーティヴな研究の息の根を止めてしまった。

大阪の吉村市長が先日、学力テストの点が低い学校の管理職の給料を減らして処罰するということを言い出しましたけれど、これが「格付け」典型的な発想です。教員たちを相対的な優劣の競争に追い立てて、恐怖心と不安を動機に何かさせるということしか思いつかない、こういう愚劣な人間が教育行政に介入するから日本の学校教育はどんどんダメになってゆく。そんなことをすれば、教員たちはたしかに上の顔色をうかがって、処罰をおそれて管理しやすくはなるでしょうけれど、教育をどれほど上意下達の仕組みで再編してみても、成果は上がりません。学力は下がるばかりです。恐怖心や不安を動機にして教壇に立つ教員がイノベーティヴな子どもたちの資質の開花を支援するということはあり得ません。教師がイエスマンばかりになれば、子どもたちもその「イエスマンシップ」を幼少の頃から刷り込まれて、イエスマンに育つ。みんながすることを他の人よりうまくできることだけに集中する。それがうまくできなければ、学校教育そのものからドロップアウトする。そうやってどんどん国力は低下してゆく。

「誰にもできないこと」をできるメンバーたちで構成された集団がもっとも強い集団だという常識が今の日本にはもう通じなくなっている。多様性を重く見るという発想がない。

小学生の学力は今でも日本は高いんです。それが中学からいきなりダメになる。中学・高校の６年間学校に通ったせいで、18歳になると先進国最低にまで学力が落ちてしまう。いったい、この６年間に学校で何をしているのか。

査定しているんです。子どもたちを「誰でもできること／できなければいけないことを、他の人よりうまくできる」競争に追い込んでいる。自分の中には「余人を以ては代え難い」資質や才能があるのではないか、それはどのようにすれば開花するのか、その能力を他の人たちの能力とどのように連携させることができるのか・・・そういった集団として生きるための知恵と技術について考える機会が日本の中等教育にはありません。

小学校のときにはそれほど格付けは厳しくありません。中高一貫校や私学に進子どもは早くから塾通いをさせられますが、それ以外の子どもたちは放し飼いにされている。それが中学に入ると一変する。全員が格付けされる。好き勝手にさせておけば学力は伸びる。うるさく格付けをし始めると学力が下がる。当たり前のことなんです。

でも、どうして、そんな「当たり前のこと」が理解できないのか。それはたぶん「子どもを育てる」というときの発想の枠組みそのものが変わったせいだと思います。それは日本の産業構造が変わったせいだと僕は思います。

僕が生まれ1950年は、労働人口のうち農業従事者が占める割合が49%でした。戦前の1920年で54%です。ということは、「ものを創り出す」というときの基

本になる枠組みが農作物の生産だったということです。資源の分配でしたら、村落における資源の分配をベースにして考えた、合意形成についても村落における合意形成プロセスが基準になった。僕が子ども時代、親たちも教師たちも、子ども時代に農作業の経験のない人を探す方が難しかったと思います。僕たちが子どもの頃の大人たちは、「ものを作る」という言葉からとりあえずすぐに思いつくのが農作業だった。自動車を作った、缶詰を作った、というような経験はなくても、畑を耕したり、稲刈りをしたりという経験はあった。ですから、当然にも「子どを育てる」という作業と「農作物を育てる」という作業の間にはアナロジーが成立した。

農作物というのは、種子を蒔いて、肥料をやって、水をやって、病虫害から守って、日照を祈り、降雨を祈りしているうちに、ある日芽が出てきて、果実が実って、収穫をもたらす。そういうプロセスですね。そのときに人為がかかわる部分というのはたかが知れています。どれほど人間が努力しても、洪水や台風や旱魃やイナゴの来襲などで収穫がゼロになることもある。だから、収穫物は本質的に「天の恵み」とみなされた。

種子を蒔く前に、種子そのものを細かく選別して、その良否を格付けしても、そんなことにはさしたる意味はありません。種子の格付けにかけるような暇があれば、土を耕したり、水路を引いたり、雑草を抜いたりして、種子が育ちやすい環境を整備する方がよほど合理的です。その方が収量への関与は大きい。

果実というのは、さまざまな要因がかかわってもたらされる「天の恵み」です。人間のさかしらが関与できる範囲は限られている。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださる」と「マタイ伝」にはありますけれど、人為がまったくかかわらなくても、狩猟、採取だけで人間が暮らしてゆくことのできる時代が長くあった。「自然からの贈与」でわれわれは身を養っているというのは、近代に至るまで、人間にとっては自明のことだったのです。

日本でも1950年代まではそうでした。農作業を現実体験として知っていた人たちが教壇に立ったときに、教師たちはごく自然に「農作物を育てる」作業とのアナロジーの中で教育を考えたと思います。この子たちは種子である。私たちは農夫である。私の仕事は水をやり、肥料を与え、この種子たち風雨や病虫害から守ることである。そうするうちに、慈雨に恵まれ、陽光を浴びて、さまざまな農作物が収穫される。開花するときも、収穫期も、結果する作物の種類も違うけれど、それはいずれも種子のうちに含まれていた潜在的可能性が長い時間をかけて現勢化したものである。おそらくそういうふうに子どもたちを見てきたのだと思います。

そういうふうにして考えている限り、学校教育と言うのは教師にとっては、かなり気楽な仕事だったのではないかと思います。人為が関与できる範囲は限定的である。教育の成果がどういうものになるのかは予見不能であり、人為に

よっては制御できないということは親も教師もわかっていた。

だから、戦後大きく変わったのは、学習指導要領の中身とか、教育プログラムとか、あるいは教員の教育力とかではなくて、産業構造だったのではないかと僕は思います。子どもたちを「農作物」のようなものとして見る教員がいなくなって、親も教師も、子どもたちを「工業製品」のようなものとして見なすようになった。農作業ではなくて、工場における工業製品の製造過程のアナロジーで教育を論じるようになった。しかたがないです。今の日本の農村人口は対総人口比で3.5%です。親も教師も、自分の手で農作物を育てた経験がある人はほとんどいない。人間は、どんなことであっても、自分が経験したことに引き寄せてものを考える。今の日本の大人たちの95%は「ものを作る」というときに「工業製品の製造過程」を思い浮かべる。自動車や缶詰を作るプロセスに準拠して学校教育を考える。だから、当たり前のように「質保証」とか「工程管理」とか「PDCAサイクル」とかいう工業製品の規格化にかかわる用語法が学校教育の場で口にされるようになった。ベルトコンベアに流れてくる未完成品がいくつもの工程を潜り抜けることで、規格化された完成品に至るという「ものづくり」のイメージは1910年代にT型フォードを製造する過程で誕生した「フォード・システム」が原型です。人類がそういう図像で「ものを作る」ということを考えるようになってまだわずか100年ほどしか経っていないのです。

でも、人間というのは「そういうもの」なんですよね。自分たちの仕事を簡略化するために機械を作り出したはずなのに、いつのまにか自分が作り出した機械を真似て動くようになり、機械を真似て思考するようになる。マルクスが「疎外」と呼んだのはまさにこのような事態のことです。

これは合気道の稽古をやっているとよくわかります。中高年の男性は総じて奇妙な体の使い方をします。機械の動きを模倣して動くのです。それは運動能力、身体能力とは関係がない。自分の身体をどのようなものとして観念しているのかという「セルフ・イメージ」の問題なんです。

機械の動きというのは、人間の四肢の動きを非常に単純化したものです。人間の身体は機械のような軸回転やヒンジ運動をしません。機械よりはるかに複雑に動く。けれども、生まれてからずっと機械を見て、機械に囲まれて暮らしているうちに、自分の身体を「機械のように」操作するようになる。

「手を挙げて」と指示すると、肘に支点を作って、肘から先を硬直させて、腕を機械のようなものにして上げ下げする。でも「耳たぶに触ってみて」と指示する、指先から動き出して、複雑な動線をたどって耳たぶに触れることができる。目的のある動作だとふつうの生き物として動けるんですけれど、手足を道具的に操作するような指示が与えられると、とたんに生物ではなくなってしまう。筋肉は骨のまわりにらせん状に付いているんですから、指先から手を伸ばせば、腕は回転するに決まってるんです。でも、そんな複雑な動きをする機械は身近には存在しない。だから、身体の自然に逆らっても、できるだけ腕を

回転させずに指を伸ばそうとする。自分自身の身体感覚よりも見おぼえた機械の動きの方を信じてしまう。機械に準拠して自分の身体を使おうとする。

この傾向は中高年男性において顕著です。彼らにしみついた機械的身体観を解除するのは、ほんとうにたいへんなんです。女性には、そういうふうに機械的に身体を使う人はほとんどいません。手足をうまく操れないという人はいますけれど、無理やり機械をモデルにして身体を操作しようとするような人は女性にはまず見ることがない。ということは、これは男女の身体の「社会化」のされ方に違いがあるということでしょうね。

中高年男性でも、社会的地位の高い人ほど「中枢的」に身体を使おうとする傾向があります。「中枢的」というのは、「中枢」である脳が運動指令を出して、「周縁」である手足がその指示に従って動くという、「上意下達」システムで身体を使おうとするということです。「組織マネジメント」のスキームに従って身体を使おうとする。

これが中高年の、それも地位の高い男性に顕著であるという理由はわかります。彼らが嫌うのは「現場への権限委譲」なんですね。「現場が自由裁量で判断して動く」ということに対する強い心理的抵抗がある。だから、手の先に何か入力があっても、即応させない。「とにかく一回上に情報を上げろ。勝手に動くな」と。「ほう・れん・そう」ですね。上に情報を上げて、上が判断して、運動指令を出すから、それに従え、と。でもね、武道的な立ち合いの場面で、入力があったときに「ちょっとお待ちください。上に訊いて参ります」というようなことをしていたら、すぐに死んでしまう。だから、何かが起きたら臨機応変、全部現場で処理できなければならない。あらゆる事態に即応できるような「現場」を作り込んでおかなければならない。それが武道の要諦であるわけですけれども、「中枢的」に身体を使うことに固執する人たちは「現場」を育てるということに関心がない。現場に自由裁量権を委譲することがよほど嫌いらしい。

「中枢的」に身体を使おうとする人の特徴は、皮膚感覚の感度の低さです。皮膚というのは、外部からの入力が最初に触れるところですけれど、そこをあえて鈍感にしている。皮膚の感度が高いと、自動的に反応してしまいますから、そうさせないために、あえて感度を下げている。ですから、際立った特徴として、視野の外で起きた出来事には反応しないというものが挙げられます。

実際には、人間の皮膚は非常に敏感ですから、視野の外側であっても、身体の近くで何かが動けば自動的に反応する。原理的に言うと、身体の近くで起きた動きと「同期」しようとする。ラジオの周波数を合わせるのと同じです。同じ周波数帯に「乗ろう」とする。武道の動きはそういう人間の本能的な反応を勘定に入れてプログラムされているわけですけれど、「中枢的」に身体を使おうとする人は、自分が知らないところで勝手に自分の身体が反応することを嫌う。「なかったこと」にしようとする。すべての出来事が「オレの目の届くところ」

で行われることを欲望するあまり、「オレの目の届かないところ」で起きた出来事については、その重要性をゼロ査定する。まるで出来の悪い会社経営者そのものですけれど、武道でも同じなんです。身体の使い方がうまくできない人は、総じて「できの悪い会社経営者」のようにふるまっているんです。自分の目の届く範囲で、小手先でちょこちょこと、機械的な運動をしてことを処理しようとする。全身を使って、のびのびと、生き物らしい動きをするということになると、全身の筋肉や骨格が連携して、自動的に動くようになるけれど、その動きは複雑すぎて中枢的、一元的にはコントロールできない。それぞれの部位にお任せするしかない。でも、それはやりたくない。

でも、この中枢的な身体の使い方への固執というのは、別にその人の身体的な欠陥や無能力というのではなくて、彼らが社会人として形成されてきたメンタリティーそのものを映し出しているんです。会社の中で、「ほう・れん・そう」というようなことがほんとうに大切だと心から思っているとしたら、そういう人は武道には向いてません。自分の身体がどれくらいの潜在的な能力を蔵しているのか信じることができない、だから身体に判断を丸投げすることなんかできないという人に武道は無理です。

まあ、別に武道なんかうまくなりたくないという人にとってはどうでもいいことなんです。でも、これと全く同じことが今の日本社会では、全てのシステムで起きている。権力や情報や財貨を中枢の一点に集約させる。そこがすべての行程をコントロールし、周縁や末端には一切決定権を与えない。それが「合理的」だと信じている人たちが現代日本では圧倒的多数を占めています。それはたしかに工場における工業製品の製造プロセスのようなものに限定すれば、それなりに合理的な解だと思います。でも、これは産業革命の前期段階に最適化したシステムであって、現代ではもう時代遅れです。ほとんどの領域では使い物にならない。まして、教育ではぜんぜん使い物にならない。

シラバスというのがその典型ですね。あのオリジナルは工業製品の仕様書です。工業製品を見ると、ラベルが貼ってあって、使用法が書いてあり、効用が書いてあり、賞味期限が書いてある。シラバスは仕様書です。この授業はどのような成分から出来ていて、それを服用するとどのような効果があるのか、それが書いてある。アメリカではシラバスは「労働契約」のようなものとした扱われます。何月何日に、どのような知識や情報を供与すると書いてあるのに、シラバス通りに授業をしなかった場合、それは「契約違反」と見なされる。学生から教師に対して「授業料返せ」と言われても、反論できない。缶詰のラベルと同じです。成分表に書いてあるものが入っていなかった、効能書き通りの結果が出なかった、それについては消費者は「クレーム」をつける権利がある。

これは教育というのは「缶詰を作る工程」のようなものだということについての社会的合意があるところでしか成立しない話です。でも、そういう話が成

立しているということは、現代日本社会もすでに「学校教育というのは缶詰を作る工程のようなものだ」という理解が社会全体で暗黙のうちに合意されているということです。

シラバスを書くのは早いと実際に授業をやる一年半も前です。今から一年半後の授業で自分が何をしゃべるかなんて、わかるはずがない。今、自分が関心を持っていることについて、一年半後も同じような関心が持続しているということはまずありえない。今日だって、登壇するまで何をしゃべるか決めてなくて、しかたなくてマクラで「戦後史五段階論」を話しましたけれど、これはつい先日思いついたネタですし、先ほどから話している「教育は工業製品の製造工程のアナロジーになっている」というのは、この会場に来る前に控室で先生方とおしゃべりしているときに、ふっと口を衝いて出て来たことです。

でも、授業ってそういうものだと思うんですよ。そのときに思いついたことを話している。だって、大学の授業で僕たちが今でも記憶してることって、ほぼ全部「雑談」でしょう？　授業の本筋から離れた話しか記憶していない。でも、雑談だけを選択的に記憶しているというのは、よく考えるとすごいことなんです。雑談というのは、先生が何かしゃべってる途中にふっと「そういえば」と言って、別のことを話し出すことです。あるキーワードがあって、それで「トラック」が切り替わる。われわれはそれまでぼおっと聞いていても、先生が「トラックを切り替えた」ことは聞き落とさない。切り替わった瞬間ってわかるんです。先生がわれわれの予測しなかった「あらぬ彼方」にさまよい出たのが分かる。そうすると、みんなその「あらぬ彼方」について行くんですね。拉致される。半分眠っていても、先生が雑談に切り替えた瞬間に学生たちは目が覚める。どうして目が覚めるかというと、「トラックが切り替わった」ということが「知性が発動した」ことだということを学生たちも直感的には知っているからです。それに対しては無関心でいることができない。

グレゴリー・ベイトソンの『精神と自然』という本の中に「人間の知性とは何か？」という本質的な問いを扱った小話が出てきます。こんな話です。

世界最大のスーパーコンピュータが完成した。人類の英知の全てを集積したコンピュータです。そこで博士はコンピュータにかねて用意の質問をする。「コンピュータは人間と同じように思考できるか？」というのがその問いです。コンピュータはしばらくごとごと演算してから、答えを紙テープにプリントアウトして吐き出す。1950年代のお話ですから、まだ紙テープの時代なんです。博士が駆け寄ってそれを手に取ると、こうプリントしてあった。

That reminds me of a story

「そういえばこんな話を思い出した」。

話はそれで終わるんです。僕はこれは人間の知性の本質を言い当てた話だと思います。「コンピュータは人間と同じように思考できるか」という質問に対して、コンピュータはイエス・ノーではなくて、「そういえばこんな話を思い

出した」と話の「トラック」を切り替えて応じた。それが人間の知性の働きの本質だということです。

こういうことって、実際にありますね。何か話しているうちに、ある単語がきっかけになって、突然あらぬ方向に思考が暴走し始める。「何か」がトリガーになって、思考が活性化したのです。例えば、ある出来事に遭遇した時に、不意に過去の出来事の意味がわかるということがあります。「ああ、『あれ』は『これ』だったのか」と突然、腑に落ちる。忘れかけていた出来事の記憶が鮮明に蘇って、その出来事の意味がわかる。無秩序に散乱していた過去の星雲状態の記憶の断片がすっと一本の線で結ばれて星座ができるように、くっきりした輪郭をとるようになる。

僕らの記憶のアーカイブの中には、たぶん生まれてから見聞きしたもの、自分が経験したすべてのことが、そのまま未整理のままストックされているんだと思います。きちんとファイルされて整理されているのは、そのほんの一部で、ほとんどはカオス的な状態のまま記憶の倉庫の床に散乱している。それが何かがきっかけで星座のように結びつけられて、一つのアイデアとして形をとる。別に先行的な図面があって、それに従って編成されたわけではなくて、自生的に自己組織化する。これが知性の働きなんです。

数学者のポワンカレが言ったことですけれど、相互に何の関連もないと思われていたことの間に思いがけない関連が発見されるとき、それらを隔てていた距離が大きければ大きいほど発見は生産的なものになる。知性の発動とはそのことだと思います。それまで全く無関係だと思われていたものの間の関係が見える。それをふつうの日本語で言うと「『あれ』って『これ』じゃん」ということになる。

ですから、授業をやっている最中に、ある言葉やある出来事がきっかけになって、「そういえばこんな話を思い出した」と言ったときに、教師の知性はポワンカレ的な意味で発動しているんです。学生にもそれがわかる。だから、それまで居眠りしていた学生たちががばっと起き上がるということが起きる。わかるんです。その衝撃は話のコンテンツとは関係ないのです。「トラック」が切り替わって、知性が予測もしなかった方向に疾走し始めたことに反応しているから。

僕は教育の場で経験すべきことというのは極端に言えば「それだけ」でもいいのではないかと思っているのです。知性が働くというのがどういうことなのかを子どもたちが目の当たりにすれば、それで十分ではないか、と。それは自分で経験するしかない。目の前で知性が発動する姿を見ないとわからない。知性が発動している人が経験している興奮は見ている人間にも感染するんです。何を言っているか全然わからなくても、興奮だけが感染する。

今からもう四十年以上前のことですけれど、大学院生の修士の頃、仏文科で川俣晃自先生のフランス語のゼミを受けていたときのことです。冬の朝の授業

で、履修者も少なくて、その日はたぶん受講者が僕一人だったと思います。寒いゼミ室で川俣先生と向かい合ってのゼミでした。川俣先生のゼミは、先生がただテクストを読んでひたすら訳して、解釈するというものでした。そのときはヴァレリーか何かを読んでいた。僕は黙って聴きながらノートを取っていた。そのとき文章の中にévénementという単語が出てきました。「出来事」という意味のフランス語です。その言が出たときに、ふっと先生が遠い目をした。そして、こんな話を始めた。

「昔、私がパリに留学していた頃。夜に下宿の近くで火事がありましてね。下宿の階段を降りていったら、マダムが起き出していて、ふたり並んで火事を見ていた。そのときにマダムがévénement とつぶやいたのです」。

エヴェーヌマンというのは英語のevent ですから「出来事」なんですけれど、それ以上のニュアンスがある。「大事件」です。L'événement de mai というのは「五月の出来事」だとなんだか恋愛映画のタイトルみたいですけれど、日本語では「五月革命」と訳されます。それくらいに強い意味がある。ですから、火事を見たマダムは「まあ、たいへんなこと」とつぶやいたんです。それを横で聞いていた川俣青年は「ああ、『エヴェーヌマン』という言葉はこういうふうに使うのか」と思った。それだけの話なんですけれど、聞いている僕にはそのときの情景がありありと浮かんできた。冬のパリの夜に燃えているアパルトマンがあって、それをガウンを羽織ったマダムと川俣青年が並んで眺めている。パジャマの上にセーターを着ただけの川俣先生は寒くてぶるぶる震えている・・・そういうふうに具体的な実感まで伝わってくる。僕の勝手な想像なんですけれど、忘れがたい情景なんです。そうなると、もうこの単語は絶対忘れない。川俣先生はテクストを読んでいる途中で、événementという単語で出会った瞬間に、自分が留学生だった何十年か前のパリの一夜のことを夜のことを思い出した。そして「そういえばこんな話を思い出した」と一瞬のうちに数十年の時間と東京とパリの距離を飛び越えて、その場面に戻ったしまった。授業を聴いている僕も先生の過去の回想の中に拉致された。そして、パリの冬の一夜を、一瞬だけ、その寒さとマダムのつぶやきを共有して、また現実に還ってきた。先生はしばらくして何ごともなかったように、また授業を続けました。そのときに読んだテクストのことは作者も題名も全部忘れたのだけれど、événementのことだけはあれから40年経っても忘れていません。それは、川俣先生の「雑談」によって、一瞬だけ、ここではない、今ではないところに拉致された経験がそれだけ強烈だったからです。

教育の本質はそういうところに潜んでいると僕は思います。学校教育の場で子どもたちが経験すべきなのは、ひとことに尽くせば「知性的であるとはどういうことか」ということです。それがどういう経験なのか、実感できれば、それで十分です。あとは自学自習できる。でも、知性が発動する瞬間は予見できることでもないし、プログラムして準備できるものじゃない。だから、僕はシ

ラバス通りに授業をするということを強制されることに我慢がならないのです。工業製品をつくるときの工程管理のようなやり方をしていて、知的ブレークスルーが経験できるはずがない。というか、そういう「バグ」が起こらないようにするために工程管理をするんですから。知性が発動するチャンスを組織的に潰してゆくような仕組みがどれほど有害なものであるか、教師たちはもっと危機感を持たないといけないと思います。

今、大学入試で英語に民間試験を導入するという騒ぎが起きていますけれど、どうして民間試験をしたがるのか、理由は簡単です。それは英語のオーラル能力が最も格付けが容易であり、かつ精度が高いと信じられているからです。おそらくTOEICは世界で最も受験者数が多いテストです。サンプル数が大きいから、評価の精度が高いと信じられている。「みんなができることを、みんなよりうまくできる」能力を査定するのに、英会話の民間テストは最適なんです。

でも、全員が一律に同じ「物差し」でその学力を測定されるべきであるというのは、現代社会に取り憑いたある種の信仰というか、狂気だと僕は思います。この病から逃れない限り、学校教育にも、そのような学校教育を許容している集団にも、未来はないと僕は思います。

僕の主宰している凱風館道場や寺子屋ゼミには中学生も来ます。不登校の子も道場やゼミには来ます。親たちは学校に行かないことを心配していますけれど、僕は別に構わないと思う。行きたくなければいかなくてもいい。でも、何らかの社会的なつながりの中に身を置く必要はあると思います。だから、年齢も性別も職業も違う人たちとの交わりのうちにいるなら学校に行く必要はない。そういう場にいれば、十分に社会性は育つ。市民的成熟を果たす上では問題ない。ひとりで部屋に閉じこもっていてはいけない。外に出て、人々と交わる機会があるなら、学校なんて行かなくていい。僕はそう思っています。

僕も不登校でした。小学校５年で不登校になり、高校は二年で中退です。1960年代のまだまだお気楽な小学校で教師が嫌いで不登校になり、高校はさらにお気楽で自由な学校でしたけれど、受験勉強にうんざりして退学してしまった。僕は大検なんです。高校は出てない。あの時代ののんびりした学校で無理だったんですから、今なら小学校低学年で不登校になって、それっきりだったかも知れません。だから、子どもたちが「学校に行きたくない」と言うのに向かって「行け」とはとても言えません。

小学校６年間、中学３年、高校３年間、あわせて12年間あります。この12年間は煉瓦を積み上げるように組まれたプログラムで、どこかが抜けると全部が崩れてしまうと考えて恐怖心を持つ親御さんがいますけれど、そんなことないんです。だって、小学校でやることと中学校でやることと高校でやることって、実は同じことの繰り返しなんです。もちろん難度は上がりますけれど、基本的には同じことを繰り返している。だから、どこかの段階で「あ、勉強しよ

う」と思ったら、そこから再スタートできるようになっている。小学校から高校までの12年間の中身はその気になって集中的に勉強すれば１年半くらいでクリアーできます。全然勉強していなくても、ある時期になって「やろう」と思ったら間に合うんです。間に合うように作ってあるんです。だから、周りにいくらもいますよ、高校生になるまで勉強を全くしなかった。ずっと野球ばっかりやっていたとか、バンドばかりやっていたとか。そういう子が高校２年の終り頃に「おっと、こうしちゃいられない」と勉強を始めて、そのまま現役で大学に受かったというような話はいくらもあります。集中力の高い子だったら、１年半ぐらいで高校までの全教科の内容は理解できます。

だから、子どもが勉強しないことも、学校に行かないことも、それほど心配するには及ばないと申し上げているんです。学校は「やり直し」が何回でも効くように作ってある。学校というのは本来「そのため」のものなんです。一度でも失敗したら、二度と這い上がれないというようなタイトな選別機構を作ったら、子どもたちは萎縮するだけで、結果的には知力も体力も気力もへなへなな人間ができるだけです。そんなものを組織的に創り出しても、集団にとっては得るところはない。学校教育は集団が生き延びるための制度です。未来の集団を支えることのできる次世代を育成するための制度です。だから、一人も取りこぼさないで、子どもたちの潜在的な資質や才能を探し出して、最大限まで開花させるというのは、当然のことなんです。学校といういうのは、子どもたちを選別したり、格付したり、排除したりする場ではありません。逆です。できるだけ多様な才能や能力を見つけ出して、それを引き出すためのものです。だから、学校からいったん出て行っても、いつでも戻って来られるように、そういう再回収のための「取り付く島」がたくさんあるものでなければならない。出入り自由自在という多孔的なものであるのが、本来の姿なんです。

でも、もう今の学校はそういう本来の姿から遠く離れてしまった。これをもとの道に戻すのは不可能だとは思いませんが、たいへん困難な事業だと思います。でも、学校教育は生身の子どもが相手のものですから、学校がなんとかまともなものになるまであと20－30年待ってくれというわけにはゆきません。とにかく、今ここで、学びの場と保障しないと、子どもたちの成熟のチャンスが失われる。だから、学校がうまく機能していないのなら、それを代替するものを今ここで作り出さなければならない。

学校を定年で辞めた後、しばらくして「とても今の学校を手をつかねて見てはいられない」ということで、自分で私塾を開いた人がけっこういます。進学塾のような格付け機関の補完物ではなくて、子どもたちの市民的成熟を支援するという、本来の学校の機能の代替機関です。たぶん今日本中でそういう始めている人がたくさんいると思います。そのうち、ビル・ゲイツみたいな大富豪がパトロンになって、「お金はいくらも出しますから、文科省なんかと関係なく、好きな教育をやってください」ということが起きてくると思います。学校がこ

のままでは日本の明日がないということを理解している人はいくらもいるはずですから。

今度、兵庫県豊岡市で平田オリザさんが新しい大学を計画しています。これは自治体が主導して作る新しい形の大学です。演劇と観光の大学だそうです。何をやるんでしょう。プログラムに合気道も入れてくださるそうです。ヨーロッパの演劇学校ではヨガ、太極拳、合気道といった課目は正課に入っていますからという心強いお言葉を頂きました。僕も兵庫県民ですし、大学のできる豊岡市の江原というところには毎年合気道と杖道の合宿で行っている馴染み深い土地なので、僕も平田さんのお手伝いをさせてもらうことになりそうです。平田オリザさんも豊岡に引っ越してきて、駒場に本拠地がある「青年団」も平田さんと一緒に来るわけです。豊岡を新しい国際的な演劇活動の拠点にしたいというスケールの大きいプロジェクトです。

そういう新しい大学を地方自治体が主導してつくるという試みが始まっている。こういう新しい動気がこれからどんどん出てくると思います。地方であっても、そこが新しい文化的な発信拠点になるということなら、今の株式会社化して、管理で息苦しくなっている大学を辞めて、そこで自由に研究教育をしたいという人たちが移り住んでくる可能性はあります。今の大学ではもうまともな研究も教育もできないと憤っている大学教員はいくらもいます。彼らに思い切り好きなことをさせてくれるという大学ができれば、地方であっても、優秀な人材は集まってくると思います。

学校は工場ではなく、里山であるべきだと僕は考えています。工業生産ではなく、農業のアナロジーで学校の形は構想すべきだと思います。一人一人の子どもたち全員が違う種類の種であって、どういう形で、いつ、どういうふうにして花が開いて、どんな実がなるって、予見不能だということを前提にして制度設計する。予見不能なので、いついつまでにと期限を区切って、これまでにこれを達成しろみたいなことを言うのは全く意味がないですよね。麦と稲に向かって、１月までに何センチ伸びろみたいなことを命じてもしかたがないでしょう。こっちは麦でこっちは稲ですから、意味ないんです。

僕は40年近く学校の教師をやっていましたからわかるんですが、子どもたちがあるときに突然、ぱっとはじけることがある。固い外被を脱ぎ捨てて、新鮮な学びへの意欲が起動してくることがある。それは感動的な風景です。でも、その脱皮がいつ起きるかは事前には予測不能なんです。ほんとに。ある日教室に行ったら、別人になっている。でも、一体何がトリガーになってそんなことが起きたのかは分からない。

学校の場合は、クラスがあって、同学齢集団が集められたり、入試で選別して、学習進度が同じような子どもたちが集められる。でも、道場はまったく違います。凱風館では、４歳から74歳まで、門人の年齢はばらばらです。昨日入った人と30年やっている人が、同じ道場で、同じ技を稽古している。進度別でク

ラスを分けるということはしません。門人の間の優劣や巧拙については一切言及しない。比較することもしない。昨日入った人と30年前からやってきている人を並べて、どちらがうまいかなんて言っても仕方がないですから。

僕が見ているのは、ひとりひとりが昨日から今日の間にどう変わったか、それだけです。稽古をきっかけにして、その人の中の何が変わったか。それは完全にパーソナルな問題なんです。その人自身の問題です。他人との強弱、勝敗、巧拙、優劣を相対的に比較して、格付けすることは武道の修業にとって何の意味もないことです。ほんとうに「何の意味もない」のです。修業は徹底的に個人的な問題です。昨日まで意識できなかったどこの身体部位が自覚できるようになったか、昨日までできなかった動きがどういうふうにできるようになったのか。自分のどこがどう変わったのか、それを徹底的にモニターする。

そして必ず仮説を立てること。昨日より変わったのは、こういう工夫をしたせいだ、ここをこう動かしたせいだ、と。何でもいいから、とにかく自分の中に起きた変化について仮説を立てる。不十分な仮説で構わないんです。

そして、自分の身体を使って仮説を検証してみる。しばらくはそれでうまくゆきますけれど、遠からず必ず仮説は破綻する。当たり前なんです。人間の身体は複雑精妙なものですから、単純な仮説で制御できるはずがない。だから、どんな仮説でも、それでは説明できない現象に遭遇する。そしたら、より包括的な新しい仮説を立てる。そして、その仮説を実験的に検証する。そして、また反証事例に遭遇する・・・そのことの繰り返しなんです。

これが修業ということです。とても楽しいですよ。仮説を立てるのは。それは一見するとランダムに見える事象の背後に「パターン」があることを発見するということですから。たいへんな高揚感をもたらす。

養老先生が子どもたちをとにかく自然の中に放り込んでおけとおっしゃる。それでいいんだ、と。何も教えなくていい。ゲームとか携帯とかマンガとか全部取り上げて、自然の中に放置しておく。しばらくすると、することがないから子どもたちは自然を見るようになる。空の雲を見る、花を見る、虫を見る、せせらぎを見る、海の波を見る・・・それぞれの好みによって、何か自然界の中の対象を選び出して、それを見つめるようになる。することがないとそうなるんです。でも、そのうちに、ふっと自然の中に吸い込まれる瞬間があるんです。

これは「パターン」を発見したときなんです。雲をずっと見ているうちに、雲の動きに「パターン」があるような気がしてくる。もしかしたら、雲というのはこういう規則性に従って動いているのはないかという仮説がふっと立ち上がる。この仮説が正しければ、次には「こういうこと」が起きるはずだと予測する。波を見ていたら、何回かに一度大きな波が来るような気がしてきた。どうも「パターン」があるらしい。だとすると次に大きな波が来るのはいつか、予測する。自分で仮説を立てた後、その仮説を実験的に証明しようとしている時に、人間は対象に吸い込まれるんです。すごい集中力を発揮する。そういう

時の子どもを横で見ているとわかります。小さい子でも、自然の中に入り込んでいる。自然もまた人間の中に入り込んでいる。自然と人間が相互に嵌入し合う。あれは、自力で仮説をつくった人間が仮説を証明しようとして実験している時にだけ起きる現象です。科学者がある仮説を思いついて、これが実験で証明されたらノーベル賞級の発見だと思って、実験をしているときの緊張感と高揚感はすごいものだと思いますけれど、それに似たことが子どもが自然を観察している時にも起きる。

知性の発動にはいろいろなパターンがありますけれど、目の前にある一見するとランダムに生起している事象の背後にはある種の数理的秩序があるのではないかと直感するというのはその最も高いレベルです。自然科学における仮説の提示、実験、反証事例、仮説の書き換えというエンドレスのプロセスはまさにそういうものです。でも、これは宗教性の発動と同型なんです。世界の偶然的な事象のすべての背後には「神の摂理」が存在して、万象を統御していると直感すること、それが宗教的知性の始まりです。科学的知性と宗教的知性は同じものなんです。

学校教育において一番大切なのは、知性が起動する、知性が発動するということを子どもたちが実感として経験することなんです。それに尽くされる。それが起きれば、あとは自学自習してくれる。でも、どういう言葉やふるまいが「トリガー」になって子どもたちの知性が動き出すかはわからない。予測不能なんです。「だいたいこんな感じのことに触れると、人間の知性は刺激され易い」という経験知はあります。「雑談」とか「自然の中に放り込む」とかはそういう無数の経験知のうちのひとつです。もちろんそれだけじゃない。無数のふるまいが「トリガー」になりうる。要するに「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」ということです。いろいろなことをやってみる。さまざまな網を投げかけてみる。そのうちのどれかが「当たる」。それでいいんです。どれか当たればいいんです。

教育というのは基本的にはそれほど「歩留り」がいいものじゃないんです。10人の生徒たちが10人、一人の先生のある言葉をきっかけにして「大化けする」というようなことは絶対に起こりません。僕程度の教師で、授業をやっていて、僕の話を興味深く聞いてくれるのは２割から３割ぐらいです。あとの７～８割はまるでわかっていない。寝てたり、携帯をいじっていたりする。でも、それで怒っちゃいけない。それが「当たり前」なんです。歩留まり率は２～３割なんです。それ以上を教師は望んじゃいけない。気にしなくていいんです。僕の話に興味がなくて、眠っている学生たちのうちの何割かは別の教師の別の話を興味深く聴く可能性があるからです。教師の数が多ければ多いほど、教えている内容が多様であればあるほど、教育方法が違えば違うほど、集団的な「歩留まり」率は高まる。それでいいんです。教師はみんなで手分けして教育事業に当たればいい。教育の主体は集団なんです。「ファカルティ（教師団）」が教育をする。個人がするわけじゃない。自分が取りこぼしても、誰かが拾ってくれ

る。セカンドがトンネルしても、ショートがカバーしてくれる。教育というのは、そういうチームプレーなんです。だから、教師を個人的に格付けして、その「教育力」なるものを数値的に査定して、給与や待遇に反映させるというような成果主義・能力主義は導入してはいけないんです。「ファカルティ」を分断してはいけない。

道場で僕が教えているのは「コンテンツ」じゃないんです。毎日毎日いろいろな技を稽古して、そのたびに技について違う説明をする。それは「トリガー」なんです。何かに引っ掛って欲しいので、いろいろなことをしてみる。それまでうまくできなかった門人が、わずか一言で一気に動きの質が変わるということが現にあるからです。

だから本来、学校ってすごい「楽なところ」のはずなんです。教えるのも楽だし、教わるほうも楽。教える方は「下手な鉄砲」を撃ちまくればいいし、教わる方は何かが「トリガー」

になって、知性が発動するのを待てばいい。もともと汗水たらして努力するところじゃないんです。今学校がつまらないのは、時間を区切って、数値的に達成目標を設定して、同じような年齢で同じような学習進度の子どもたちを集めて、「みんなげできることを、みんなよりうまくやる」競争に追い込んでいるからです。そんな環境で知性が起動するはずがない。

僕は学校の先生たちの集まりによく呼ばれます。最後の質疑応答の時に必ずフロアの方から「先生、そんな絶望的なことをおっしゃっていますが、じゃあこれからの学校教育はどうしたらいいんですか」と訊かれます。だから、「学校教育をよくする方法もなくはない」と答えます。「何ですか」と言うから、「年齢別・進度別にクラス分けしない。成績をつけない。この二つを実行すれば、学校教育は蘇生します」とお答えします。すると、みんながっかり肩を落とす。「それができたら苦労はないです」と言う。でも、話は逆なんです。その方が苦労がないんです。だって、成績をつけなくていいんですよ。それによって教師がどれほど楽になるか。「でも、成績をつけないと子どもたちが勉強しなくなります」って口をとがらせる先生がいますけれど、そこで言っている「勉強」て、「よい成績をとること」でしょう。そもそも「よい成績をとるために努力しなくていい」といっているんですから、心配することはないんです。すべての教育事業が「成績をつける」ということを前提にしている。成績に基づいて、子どもたちを格付けして、それに基づいて、社会的な地位や威信や財貨や文化資本は分配されるべきだと教師自身が思い込んでいる。その前提が間違っている。いろいろな教師がいろいろな教科を教えるのは、「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」からです。大根とジャガイモと米とタマネギを「格付する」って不可能でしょう。何を基準に格付するんです。だって「別のもの」じゃないですか。比べてもしょうがない。それぞれの野菜がすくすくと美味しく育つ工夫をすれ

ばいいだけで。どちらが美味いか、どちらが社会的に有用かなんてことを大根とジャガイモの間で比べてみてもしかたがないじゃないですか。

でも、今、学校でやっているのはまさにそういうことですよね。子どもたち一人一人が大根であったりニンジンだったりカボチャだったりするのに、それをある基準で斉一的に格付しようとしている。そんなことして何になるんですか？

日本の学校教育は大きな転換点を迎えていると思います。このまま子どもたちを規格化・均質化して、競争させる格付け機関になるのか。それとも、子どもたちの潜在的能力を最大化するように支援するのか。とりあえず、格付け機関になってから、日本の学校の学術的発信力が劇的に低下していることは統計的に明らかです。自然科学に関しては、先端的な研究者はあと10年だと言っていました。あと10年で今の仕組みを根本的に改めないと、もう日本の自然科学研究は終わる、と。すでに若い研究者たちは、どんどん韓国とか中国とか台湾とかシンガポールに移っています。そちらの方が自由な研究環境が保障されているし、しばしば給与も高いわけですから。それは移りますよ。

日本の教育行政にあれこれ言っている人間たちはしばしば自分の子どもは留学させている。前に朝日新聞の紙面審議委員をやっていた時に、隣の委員が日本の学校教育をあしざまに罵っていた。でも、彼が提言するのはさらに格付けと選別を強化して、一部に教育資源を集中させる「選択と集中」的政策だったので、僕とははげしく対立していた。日本の学校に何か恨みでもあるのかと思っていたら、ある日自慢げに「うちの娘は高校からずっとニューヨークで学んでいて、今はハーバードに行っている」と言うんです。子どもをアメリカのハイスクールにやってハーバードに行かせてというのは、日本の学校教育に期待していないということですよね。日本の学校に通わせたら、「使いものにならなくなる」と思っている。それはある程度正しいと思います。でも、それだったら、これ以上日本の学校を悪くするような提言はしないで黙っていて欲しい。僕は日本の学校の現場にいて、教育政策の致命的な失敗のあおりを正面から食らって来たわけですからね。その苦労も知らない人間が何を偉そうに言うのかと思いました。

今の自民党の政治家たちや高級官僚たちはおそらく半分ぐらいは自分の子どもを海外に留学させていると思います。閣僚名簿を見ても、もう半数は最終学歴がアメリカの大学か大学院です。日本の学校を出たのでは「格が落ちる」と信じているような人たちには、日本の学校がどうあるべきかを決める権利はないと僕は思います。だって、自分の子どもには日本の学校教育を受けさせてないわけですよ。「英語ができる日本人」教育も、道徳教育も、そんなものを受けさせたら自分の子どもが「使い物にならなくなる」ということは知っているんです。あれは「奴隷」を作るための教育であって、自分の子どもはいずれ「エ

リート」になるので､そんな「奴隷用教育」は受けさせられないと思っている。

ビジネスマンもそうです。ある程度以上のランクのビジネスマンたちは子どもたちを海外に留学させています。それだけ日本の学校教育が機能していないということを知っている。知っていながら、日本の学校教育に対しては「上の言うことに逆らわず、低賃金で、過労死寸前まで働く労働者」の大量生産を要求してくる。経営トップは自分の子どもたちがそうであるように海外の教育機関で育てるから、日本の学校は「こき使われる人間」育成に特化していいだろうと本気で思っている。

でも、われわれのほとんどはこの日本列島から出ることができない。ここに踏みとどまるしかない。日本の学校を守り、日本の医療を守り、日本の農業を守り、日本の民主主義を守り・・・というたいへんな仕事を自分たちで担うしかない。誰にも替わってもらえないんですから、われわれがやるしかない。日本列島に住み、ここから出ることができない１億2,700万人と手を合わせて、日本がこれ以上衰退しないように手立てを考えなきゃいけない。国運回復の鍵は、もちろん子どもたちです。どうやってこれから育つ日本の子どもたちを伸び伸びと育てて、彼らが愉快に、華やかに才能が開花できるような仕組みを作るか。それが最優先なんです。

そのためには、学校を査定や格付けのための機関にしないということです。子どもたちの成熟を支援することが学校教育のアルファでありオメガであるという教育観を国民的な常識として共有してゆくこと、それが大事ではないでしょうか。予定の時間を大分過ぎてしまいましたけれども、一応､「教育法としての修業」らしきことは語りました。ご静聴ありがとうございました。